

スポーツの意義・価値について考える

—スポーツ社会学における取組み—

出口順子*

1. はじめに

本学スポーツ健康科学部では、保健体育教諭、スポーツ指導者、健康づくりリーダーなど、よりよい健康社会の構築に貢献する人材の育成を目指している。よって指導的立場を念頭に置いた、スポーツに関する学びが必要不可欠である。どのような学びが必要かについて、文部科学省編『私たちは未来から「スポーツ」を託されている—新しい時代にふさわしいコーチング—¹⁾』では、コーチングに必要な知識・技能として哲学や倫理等の人文・社会科学的な課題を知ること、トレーニング科学に関する知識・技能を学ぶこと、スポーツ医学に関する知識・技能を学ぶことが挙げられている。中でも人文・社会科学的な課題を知ることが、「なぜ自分はコーチングを行うのか」「コーチとして何をを目指すのか」「そのことが社会にどのようにつながっていくのか」を考えることにつながるとされている。このようにスポーツの意義・価値について考えることは、指導者としての自分自身の立ち位置を明確にするものと考えられる。そこで本稿では、スポーツ社会学の授業を通して学生が学び得たことについて、特にスポーツの意義・価値に着目して報告する。

2. 授業概要

2-1. 授業の到達目標および内容

シラバスでは授業概要を以下のように記載している。「これまでスポーツは、単に身体運動としてのみ存在してきたわけではなく、社会を反映した文化として存在してきた。グローバル化が進む中で、スポーツも例外ではなく、国境を越える文化としてますます人々の関心を集めてきている。その一方で、スポーツがあまりにも身近なものであるために、分かっているつもりになっていることも多いのではないかと。スポーツ社会学では、いったんスポーツを身体と切り離し、社会的な文脈と関連付けて捉えることによって、スポーツの抱える今日的な問題等を客観的に見、考えていくことを目的とする。」そしてその上で次の到達目標を3点示している。1) スポーツ社会学のフレームワークを説明できるようになる。2) スポーツを様々な社会的事象と関連して考えることができる。3) 現代社会におけるスポーツの意義について自分なりの考えを持ち、主張できる。これらの到達目標を達成するために、「スポーツの本質」、「利用されるスポーツ」、「スポーツ政策」、「多様なスポーツ関与」の4側面から授業を展開している。「スポーツの本質」では、スポーツの語源や歴史に言及しながら、遊びとスポーツについて理解を深めている。「利用されるスポーツ」では、スポーツがこれまで社会の中でどう位置付き、どのような役割を担われていたかということに主眼を置き、ベルリンオリンピックやロサンゼルスオリンピック、日本における企業スポーツ等を題材にしながら学んでいる。「スポーツ政策」では、これまでの日本におけるスポーツ振興施策やスポーツ推進体制の現状、障がい者スポーツの現状を理解した上で、

* 東海学園大学スポーツ健康科学部講師

スポーツ振興のあり方を考えている。最後に「多様なスポーツ関与」では、「する」「みる」「支える」スポーツの現状や、総合型地域スポーツクラブ、ジェンダーとスポーツ、環境問題とスポーツについて考えながら、社会の中のスポーツについて目を向けている。すべての授業を通して、スポーツの意義・価値について受講者に働きかけ、多面的に捉え、自分自身で考えるよう促している。

2-2. 履修者

スポーツ社会学は、2 年次春学期配当の選択必修科目であり、また教職課程科目（教科に関する科目）である。さらに（公財）日本体育協会スポーツリーダーの資格取得関連科目でもある。よって履修人数が毎年多くなることから、学籍番号によって A クラスと B クラスに分かれている。2016 年度の履修者は A クラス 161 名、B クラス 142 名であり、2 年生のほぼ全員が履修している。

3. スポーツの意義・価値についての記述

スポーツの意義・価値についてスポーツ社会学の授業を通して学生が学び得たことについて明らかにするために、初回の授業でスポーツの意義・価値について記述をしてもらい、授業終了後の定期テストにおいて再びスポーツの意義・価値について記入してもらった。定期テストにおいては、授業を踏まえてスポーツの意義・価値について論じるよう指示した。

4. スポーツ社会学を通じた学生の学び

履修者がスポーツ社会学を通して学び得たスポーツの意義・価値には以下のようなものがみられた。履修前後で比較し、明らかにしたい。

第 1 に、履修前は個人の経験の範囲に留まっていたものが、履修後は社会に目を向け、社会との関わりの中で価値を考えられるようになった点が挙げられる。例えば履修前には「スポーツを通じてたくさんの人と出会うことができ、自分の人生の幅を増やしてくれた…（中略）人間が生きていく上で重要な協力することの大切さや、目標を達成する為に努力することを教えてくれた」と記述していたが、履修後にはこれまではスポーツの一側面しか捉えてこなかったことに言及し、以下のような記述になっていた。「現在の社会はどうしたら人々がスポーツと関わっていけるのか、スポーツと関わっていくための施設や施策などが出されていて、これは社会がスポーツを必要としているからだと考える。健康増進や、現在不足しつつある地域住民同士の関わりの方がスポーツであり、気分転換、息抜き、趣味としてスポーツをすることで社会がよりよい方向へ向かっている。さらにスポーツは、人を引き付ける力や勇気を与えることができる。東日本大震災や熊本での震災で被災された方々へ向けたスポーツ界の援助がなされている。（中略）何よりスポーツにはとても大きな影響力があるということが社会に対する意義や価値だと思う。」このような個人の経験から社会とのつながりへの視点の転換は、多くの履修者においてみられた。

第 2 に、履修前には表面的あるいは曖昧な表現だったものが、履修後には具体的又は論拠のある表現になっていた点が挙げられる。例えば履修前は、「スポーツは、体を健康にするだけでなく、気分をリフレッシュさせたり、娯楽として楽しんだりすることができる」という記述だったものが、履修後は、「スポーツは、これからの社会に存在し続けていかなければならない「鍵」のような存在であると感じる。スポーツは今や地域と連携し、色々な人々に親しまれている。私が住んでいる地区でも地域型のスポーツクラブがあり、子どもからお年寄りまで幅広い年代の人々がスポーツを通して触れ合っている様子をよく目にする。（中略）また、企業との連携では、多くの選手が企業に在籍し、活躍している。結果として、

経済効果をもたらすこともある。』という記述になっていた。この事例では、自分の生活圏の範囲内での社会とのつながりの報告に留まっているが、それでも社会との関わりの中でスポーツを具体的に捉えることができるようになった点に、履修者の学びを感じることができる。

第 3 に、履修前にはスポーツを盲目的に礼賛していたものが、スポーツの負の側面（問題）を踏まえたスポーツの価値への言及に変わった点が挙げられる。履修前には、「私はこれまでスポーツと関わってきて、人間的に大きく成長できたと感じています。（中略）私は、サッカーボールさえないアフリカの地を訪れたことがあります。そこで感じたことは、サッカーボール 1 つでみんなが笑顔になれること、その小さな平和がこの世界の平和につながるのではないかと感じました。」という記述だったものが、履修後は、「スポーツ社会学において学んできたことは、スポーツは決して良い面だけではなく、悪い面もあり、これから指導者になっていく上でマイナスな面、批判的な目線でスポーツを見つめ直す必要があるということである。（中略）スポーツは授業で学んだように、遊びという概念によってつくられたもので、させられるもではなく、自ら進んで行うことがスポーツの本当の在り方なんだと思うが、現代におけるスポーツは、スポーツというものの根底にある楽しむことや気晴らしで行うものではない。（中略）これまで学んできて、勝つためだけにスポーツをやっているという問題点があることを知った。私はこれが今のスポーツの問題点だと思う。（中略）指導者として結果だけに重きを置かず、過程を評価することを大事にし、スポーツの価値として人々が生涯健康でいられるツールとしてスポーツを行うことがスポーツの意義だと思う。」という記述となっていた。このようにスポーツを客観的に捉え、自分自身のスポーツに対する価値観を構築できた履修者は決して多くはなかったが、多面的にスポーツを捉え、学ぶことの重要性が示唆されたと言えよう。またナショナリズムに関する問題、ドーピングに関する問題、野球賭博、八百長問題、政治とスポーツとの関わりについての言及している履修者もみられた。

第 4 に、スポーツに対する関心が広まったり、考えが深まったりした記述がみられた。例えば授業で取り上げたスポーツマンシップやフェアプレーに関心を寄せ、そこからスポーツの意義・価値について考えた履修者がいた。また、スポーツの楽しさに着目し、スポーツが遊びの文化であることに言及しながら、スポーツの本質について論じたものもみられた。「総合型地域スポーツクラブのような場所は、自分の意志で楽しさを求めて通っている人が多いだろう。それこそ本来のスポーツのあるべき姿である。」といった記述である。客観的根拠は乏しいものの、スポーツの本質を学び、それを踏まえた価値観を構築できた事例と言える。

第 5 に、スポーツを取り巻く現状や問題に言及し、具体的な解決策を提示した記述がみられた。例えば以下のような記述である。「スポーツは世界共通文化の一つで、言語や生活習慣の違いを超え、同一ルールの下で競うことやサポーターとして支えることで相互理解や認識を一層深める。これらはスポーツ基本法にも掲載されている。しかし現状はどうだろうか。近年生活の利便化の影響を受けて運動不足に陥りやすい生活環境である。実際小学生の体力テストの結果をみると、現代の小学生が昔の小学生の結果を下回っているものがみられる。また現代は少子化により部員数の減少で部活動が停滞したり、経済情勢や社会構造の変化によって企業スポーツの休・廃部が相次いでいる。これらのようにスポーツをやりたくてもできない環境がある。これらを解決するには誰もが生涯楽しんでスポーツをする社会づくりが重要であるが、指導者の養成や指導者の確保、ノーマライゼーションなどの問題がある。これを解決するのが総合型地域スポーツクラブである。総合型なら誰もが楽しんでスポーツをすることができ、スポーツへの関心を高め、活力ある社会の形成につながると私は思う。」この履修者は、授業履修前のスポーツの意義・価値については、社会に出て通用する力を身に付けることができる、コミュニケーション能力を培うことができるとしていた。個人的な価値から社会的な価値に目を向け、さらに具体的な解決策を提示した事例である。また「スポーツは遊びという考えの下、社会全体でスポーツをする場所、遊ぶ場所を奪わないで増やしてほしい。そうすれば子どもの体力も向上するかもしれない。

社会はスポーツを競技の側面だけで捉えず、遊びという側面からも捉え、遊びも大切ということをもう少し伝えていけるようになると、より良い日本のスポーツ環境になるのではないかと考える。また、今の子どもは遊び方を知らないので、今の親が子どもと共に遊び、次世代につなげていくことで、運動する人が増えると考え。そのためにも今の大人が伝統遊びを教えるなど、行動しなくてはならない。」という記述もみられた。この履修者も履修前はストレス解消や人々の交流をスポーツの意義・価値として挙げているのみであった。

最後に、「授業を通じてスポーツというものの意義や価値というものが分からなくなってきた。」という記述がみられた。この履修者はさらに「私はスポーツは素晴らしいものだと考えているし、自己を成長させてくれるものだと考えてスポーツをしてきた。実際、スポーツを通じて自己成長することができたと感じている。だが、それがスポーツの価値かと言われると、分からないというのが本音である。」としている。その上でスポーツにおけるドーピングやオリンピック選手の犯罪等を挙げ、「これらを踏まえて考えると、私はスポーツの価値は何なのだろうかと考えてしまう。」と述べている。このようにスポーツに対して懐疑的に考えることができることも授業の成果だと考える。

5. おわりに

本稿では、スポーツ社会学の授業を通して学生が学び得たことについて、特にスポーツの意義・価値に着目して報告することを目的とした。具体的には授業の初回でスポーツの意義・価値について記述をしてもらい、授業終了後の定期テストにおいて再びスポーツの意義・価値について記入してもらうという方法を用いて、考えがどのように変化したかを中心に報告することとした。

スポーツ社会学の授業を通して履修者が学び得たスポーツの意義・価値には、大きく6つのものがあると考えられた。1) 個人の経験の範囲内の意義・価値から社会との関わりの中での意義・価値への着目 2) 表面的な意義・価値から具体的な意義・価値への言及 3) スポーツ礼賛からスポーツの負の側面を踏まえた価値観の構築 4) 関心・考えの深まりから自分自身の価値観の構築 5) 現状や問題に言及し、解決策の提示 6) スポーツを懐疑的に捉える である。

今後は履修者同士のディスカッションや授業内でのディスカッションをできる限り多く取り上げ、一部の学生だけでなく、より多くの学生が学びを得られるよう促していきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省編『私たちは未来から「スポーツ」を託されている—新しい時代にふさわしいコーチング—』学研パブリッシング 2013 pp48-50.